

特242

628

融和運動への
通俗的批難について

藤 範 晃 述

大日本青年融和愛國聯盟

機関誌・融和報社發行



0038984000

0038984-000

特242-628

融和運動への通俗的批難について

藤範晃・述

大日本青年融和愛國聯盟

昭和8

AGH

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

2

發行者の言葉

大日本青年融和愛國聯盟は、昭和七年三月十四日「國民融和日」に生れた吾等の盟ひであります。本部を京都市伏見區深草第一小學校に、事務所は、同飯食町五番地に置き、事業としては機關誌融和事報の發行・講演會開催・自働車宣傳・パンフレット刊行・座談會・研究會開催等を行つて居ます。

吾等の盟ひ、吾等の結びは、「聖なる結び」であつて、「結ばれたる同志」は永遠に離れぬ結びであります。吾等の運動は、かくして助長され達成されて行くものである、本聯盟の存在が若し不必要になり、又目的達成を阻害する慮ありとするならば、吾等は何時にも解消を惜しむものではありません。

その行手は必ず「イバラ」の道であり苦難の嶮があらうと信じてゐます、如何なる迫害・壓迫も吾等の前には何等の障害にもなりません、終生、陋習打破の叫びをつゞける事を各位に誓ふものであります。

大日本青年融和愛國聯盟
機關誌融和事報社

河上利治

はしがき

今日の融和運動は、そのなかば以上の力を啓蒙にそゝいで居り、その啓蒙運動の中心

は所謂 俗難に對する啓蒙であるかのやうに見えます。

俗難とは、通俗的な批難であります。

運動の本核にふれないで常識的に、半面的にも物を見て、かれこれとあたため主張や
ら批難やら批評やらを續けるのであつて、それがまた、俗難であるだけに大衆の
しやすいのであります。

さうした意味に於て、正面から、正々堂々と理論闘争をしてゆくだけのものではな
けり、
各地で行はれてゐる俗難中の大きなものを集めて見ると、杜撰ではありますが大體、

左のやうなわけかたが出来ると思ひます。



敬遠から来た俗難

寝てゐる子を起すといふ難
さわらぬ神にたよりなしといふ難
改善しなければ駄目だといふ難

因果の錯倒から来た俗難

分散すればいゝといふ難
宗旨をかへればいゝといふ難
結婚問題さへ解決せばいゝといふ難

俗難

無自覚から来た俗難

内部	
差別などの問題をきくのは肩身がせまいといふ難	もうよほどよくなつてゐるからといふ難
差別はそんなに重大事でないといふ難	私に差別はないからといふ難
寝食を共にしてゐるからといふ難	数がすくないから關係がないからといふ難

理想主義から来た俗難

宗教、其他教化さへ徹底すればといふ難

敬遠から来た俗難のうちで、寝てゐる子を起すからいけない、といふのと、さわらぬ神にたよりなしといふのは、積極的な敬遠であり、改善しなければならぬといふのは

消極的な理由で敬遠しやうといふのです。

因果の錯倒から来た俗難の分散説、改宗説、通婚説は、最も數多く接するところのものでありまして、比較的知識階級に多いところのものであります。

いづれも不可能なことばかりであるにかゝはらず、結果を豫想して見た時の朗かさから此の説の主張が多いのでありませう。

無自覚から来た俗難のうち、内部側に關するものは、今ではもう殆ど過去のものとなりはじめてゐますが、一般側の方のものは、まだ多く残されてゐるやうであります。

理想主義から来た俗難は、熱心な教化關係者などに多いのであつて、その熱心であればあるだけ、融和團體などの直接運動に對して、さわりになる場合があるのです。

以上に極めて簡単な説明を加へたものが本冊子でありまして、逐次的解説の無味から逃れるために小さなストーリーの形式をもたせたものであります。

紙數に制限がありますため、充分その意を盡さないことを遺憾と致します。
猶、文中、村長さん、校長さん、區長さんと、いろいろの肩書のある人をならべまし

たが、今の融和問題でかうした地位にある人はかうだといふのではなしに、便宜のため

に、たゞ羅列したにすぎないといふことをお断りして置きます。

融和運動への通俗的批難について

— 覺醒説 —

此の説の中心は、忘れかけてゐるものをおもひ出させるのがいけないといふのである。殊に、内部が目ざめて来る時、あらゆる要求の聲が大きくなつて来て始末に終へないといふ氣持も相當加つてゐる。

併し寝てゐる子供ならきつと目をさます時があるのである。既に解放運動が熾に起されて来たではないか。歴史的に壓迫を加へ、差別に差別を加へることは、そして、その重壓をそのままに

「今度、青年融和講習會に出席致しまして、融和問題の重大なことを始めて知つて参りました。是非、うちの村でも、講習會を開いていたゞいて、村民全體にこの事を教へていたゞきた、と思ひますが如何でせうか」。

静かな村役場の一室、二十二歳の青年に應對してゐるのは白い美髪をたくはへた村長さんです。

「……併し、この村には、昔から差別事件が起つた事がないほど平和に行つて居るから、今更、そんな講演會を開くのは、かへつて寝て居る子を起すやうなものぢやと、わしは思ふのだが……」

「併し村長さん、差別事件がないから融和が充分出来てゐるとは思はれません、はづかしい事ですが、現に私の母親なども

して置くことこそ、全く危険であるといはねばならぬ。我々の運動にとつて一ばん怖ろしいのは糊塗政策である。

— 逃避説 —

さわらぬ神に崇りなしといふ敬遠逃避説の本據は無論差別發生以後の諸現象にあるので、糾弾が過酷であるとか、取あへば事がめんどうになるといふ感情的なものを多く含んでゐる。糾弾が暴力にまで到らねばならなかつた理由がどこにあるか、事毎にめんどうになつ

そんな××の講習へなど行かない方がいと、明かに差別意識を表示した位です。また寝てゐる子なら、きつといつか、目をさます時があると思ひます。いま、なんにもないからと言つて糊塗してうち捨て、置く事は、村永遠の平和の上から、好ましいことではないと思ふのですが」

村長さんは、煙草の火をつけて、一寸顔をしかめながら言ひました。

「君は若いから、ものを一本調子に考へるのぢやが、そんな問題に、かゝり合つてゐると一寸口をすべらすとか、やりぞこなふと糾弾ぢやなどとひどい目に會ひますぞ——さわらぬ神にたゝりがなし、といふが、あんなむつかしい問題は、あまりかゝり合はないのが一ばん得策だと思ふ」。

「併し村長さん。私はさうは考へません、人間を人間が差別する、その罪は糾弾されるに償するものであり、また、糾弾せずに居れない心持になるのも當然だと思ひます。そんな糾弾を

てゆく理由がどこにあるかといふ深いところまで考へたならば決して敬遠説など起り得ないのである。無論暴力を肯定するといふのではないけれど、かくせいめたといふことを深く考へねばならぬといふのである。

したり、糾弾をされたりすることのいらぬ社會をつくるためにまづ、村民全體に啓蒙の講演會をひらきたいと言ふのは私の考へなのです」。

さう言ひ乍ら、青年は、しみじみと考へた。村民には慈父のやうに慕はれてゐるいゝ村長さんだ、が、あのお髯が、まつ白になつてゐるほど年をめしてゐる、その年齢が、此の重大な問題をわからせないでなからうか、と。

村長さんは、ごほん、と大きくせきをしてから聲を落して言ひました。

「……融和。それはまことに結構なことぢやが、我々だけが一生懸命にやつたつて何にもなりはしない、内部側が……」

青年は、力強く引きうけて言ひました。

「さうです。だから今度の講習會では、内部自覺こそ、問題解決の鍵だと講師が言はれました」

「其處ぢや其處ぢや。内部側が、ほんとに正直になり素直になり、生活を改善しなへすれば、きつと融知は出来る」。

青年は、あいた口がふさがらなかつたのであります。

内部自覚運動が、部落改善事業と同一視されてゐたのでありましたから。

「——どういふわけで、あんな生活状態に置かれるやうになつたのでせう」。

老た村長さんには、此の事が別らぬやうでした。

青年は、講習会で聞いて来たまゝの知識を語りました。

「差別によつて、職業の自由、経済の自由、社交、其他一切をうばゝれたのです。それがために、一般の生活とは、風俗にしろ、言語にしろ、経済状態にしろ、全部が變つて来たやうに聞いてゐます。このんで自分の方からさうなつたのではなくてさうさゝれて来たのだといふことです」。

—改善説—

あの内部の生活状態では、あの人格では、到底融和しやうとして融和が出来ないぢやないか、差別撤廢を主張する前に先づあの生活状態を改善しなければ駄目だ。といふ所に、理由をつけて敬遠しやうといふところに現在の部落批判が置かれてゐるのでは、とても融和の出来やう筈はないのである、何がかくせしめた

か、といふ原因的な考察をなさねばならぬことは勿論、改善の極地に到達してゐても眞の融和の出来てゐないことを充分思ひかへして見なければならぬ。

改善は社會事業として効果はあるであらう。けれども第一義的に差別を撤廢するところの力を持つものとは考へられない。

しかも此の改善が内部自覚運動と混同誤解されてゐるに到つては、全く片腹痛いことである。

—分解説—

分散をしなければならぬといふところに、現部落に對する差別が包蔵されてゐる

「はゝゝ……」。と老村長さんは笑ひました。

「君は講習へ行つて来て急に偉くなりましたなあ。……兎に角、講演會のことは充分考へて置ませう。校長さんとも相談をして……」。

と責任を回避しやうとします。

「ぢや僕が、今から校長先生をおたづね致します、おいそがしい中へ出まして失禮しました」。

役場を出ると、陽は暖く輝いてゐた。暗くなりかけた青年の心は、此の輝く太陽に、急に力づけられて、小學校へ急いだのであります。

二

放課後の校長さんは、煙草をふかしながら新聞をよんでゐました。

青年は、役場で話したやうに講演會のことを言ひ出した。

る。しかも此の分散が経済的に見ても今の社會差別の濃厚さから見ても到底行ひ得ないものである。即時分散が行はれないとするならば漸時分散でもよいといふ説も相當あるやうであるが分散し得る力量——經濟的にも精神的にも——を有するものから分散して行けばそのあとに残されるものによつて、どんな結果が産み出されるかを考慮に入れなければならないのであるね。

「講演會ですか。そんなことを一回や二回やつたつて何にもなりませんよ」

「ちや、講習會をでもやる方が？」

「なに、僕には大いにいゝ意見が二つ三つあるんですがね。」

校長さんは、茶をすゝめてから、大いに得意になつて話し始めました。

「大體差別のあるのは密集した部落が存在するからですよ。あれを分散して仕舞ひさへすれば、完全に融和が出来ますよ。」

「全くですが、そんなに分散が、經濟的にも精神的にも簡單にゆくでせうか。」

「うぬ」と、校長さんはうなりました。

「僕は思ふのですがね、密集するとか、一部落の形態をそなへてゐるとかいふことが直接何にも差別の原因をなしてゐないと。その證據には、とても見苦しい貧民窟などでも、因習差別

面から認められてゐる事實である。これを更に深刻にしたものこそ、この順次分散説であるといはねばならない。

——改宗説——

眞宗は××宗といふなどの現状から來た難であるが、改宗して融和出来る位なら、同一宗派内に於ける内部と一般との融和が完成されて居らねばならぬ筈であるのに、それが行はれてゐない事實を通じてでも、如何に此の説が、愚劣なものであるかゞ證せられるのである。

——通婚説——

結婚は人生最大の重大事で

をうけてゐないのですからね。」

校長さんは、其處で巧妙に話を轉じました。

「宗旨が一つにきまつてゐることもいけないことですね。改宗して同じ儀式を取入れるやうにすれば、大いにいゝわけですが……」

「何でも、聞けば、内部の多くは眞宗と日蓮宗だといふことですが、差別をうける苦しみに泣くものとして、多くは、かうした宗教に走つたのでせう。宗教が異ふから差別が生じたのでなくて、差別のために同朋同行を標榜するところの宗教などへみんなが、かたまつてしまつたのでせう。」

こいつもいけない、と校長さんは思つたのでせう。これこそ融和問題解決の結論だといふ前提のもとに言ひました。

「ね君、講習會だの講習會だのを百邊、くりかへすよりは、若いものがどんく結婚するのだ、結婚さへすれば、万事解決

あつて、これを融和方策に利用するさいふことは人生への冒険である。かりにこれを利用推奨して見ても現在の各個人の差別意識程度並に社会差別意識程度では到底圓滿對等なる結婚は行はれ得ないのである。自然に、何のこだわりもなく結婚をなし得るところまで融和の状況がすんでゆくことをこそ願ふものゝ、無理をして、不自然な結婚をすゝめ、悲劇の二重奏を奏するなどは、最も人間を愛するものゝ口にしてはならないところのものである

がつぐよ」。

「ええ、さうです。結婚さへ出来れば、全く申分ありません。それが出来ればもう融和運動の必要はないわけです。けれども現在では、到底出来ないことですから、先づ啓蒙から始めねばならぬわけです。——此の間の講習会で、いろいろお話を聞きました。その中でも、とても痛ましいのは、知らずに結婚して、子供さへ出来てゐる仲が、とう／＼破婚になつたといふことです。まして、よく知つたもの同志で結婚が正式に成立するといふことは全く雨夜の星のやうに、少ないものです。校長さんの仰有る通りに早く結婚が出来るやうに、融和運動の徹底をはからねばならぬことです」。

「さういへばさうですね」

「そこで、講演會を開催する件は、どうしたものでせう」

「まあ、ちつくり考へやうではありませんか、村の有志方と

も充分相談して、殊に、内部の方々が、はたして、これを要求してゐるかどうかもわかりませんしねえ」

三

校門を辭した時は、陽が西に傾ひてゐました。すぐ家にかへらうか、とも思たのですが、校長さんの最後の言葉、内部への相談といふことこそ、非常に重要であるやうに思はれました。少し遅いとは思つたけれど、大字〇〇の方へ足をはこびました。

第五青年支部長をしてゐる青年は、訪れて行つた青年を快く迎へました。

「……ところで今度僕が講習から歸つて此の村の差別意識の状況をつくづく見かへして見ると、とてもひどいものだと思ふので、啓蒙の講演會でも開きたいのですが賛成していただけますか。」

——嬰退説——

内部のものにとつて、融和問題に関する話を耳にすることは、何さなく、肩身せまく感ずることであるといふのだが、自らが自らのために奮起せずして、どうして此の問題が解決されやう、自らの立場をばつきり知つて、その不當を除去するため、敢然として戦ふことこそ、そして、解放の實をあげるからこそ、最も重要なことであるといはねばならない。

支部長さんは言ひました。

「そりや必要かも知れませんが、僕等が此の問題の話を聞いたりすることは、自分が組上りのぼされてゐるやうに、つらい苦しいことですからね。何だか肩身がせまいといふわけですよ。だから……」

支部長さんは、あまり気がすまぬやうでありました。しかし訪れて来た青年にとつて、一ばん頼みとするのは、内部青年の眞に自覚ある行動だと思つてゐますから、一生懸命に、説き伏せることに努めました。

「さうかも知れませんが、しかし、それはまるで化膿したところにメスをあてることをさけるやうな心持ではありませんか。現實の社會をよく見れば、曠然と差別は存在するのです。自ら目を覆ふて、それを見ないことは、自分自身に對して忠實なこととはいへないぢやないでせうか」

—— 諦観説 ——

昔はひどかった、今はよくなつて来た、といふところのあきらめは、老人たちの間によくあることである。自覚のない時、この言葉が流れ出る。人間としての生くる権利に目ざめたものならば、兎の毛羊の毛のさきにつく塵ほどの差別に對しても生命を冒瀆するものとして、當然なる抗議が行はれねばならないのである。これと略、軌を同じくしたものに、申譯までの運動や事業に對して、安心し、喜んでゐる安價さが相當に多

さすがに支部長さんは青年時代にあるだけで、はつきりしてゐます。

「全く、さう言へばさうです。むしろ、僕達こそ第一に講習を受け、第一に解放の要求をしなければならぬのでした。全く、無自覚であつたといはねばなりません。大いに友人たちに説いて、僕たちは僕たちの立場から、積極的に活動するやうに何かと考へませう。その講演會も是非開いて下さい。大いにやりませう。」

其處で二人は、力強く立ち上りました。そして區長さんを訪問したのでした。

區長さんは七十二歳といふ老齡です。

「は、は、は。若い方は何にも知りますまいがなあ、わしなどの若いときはとてもひどかつたもので、今とくらべるとお話にならぬ程ですちや。あまり欲ばると却て、かれこれ言はれるで

いやうである。これなども
はつきりしなければならな
いことであらう。

あらうから、まあ、この邊で辛抱してそろくやつては
どうぢやな」

青年は、これに答へました。

「でも區長さん。差別されることはやむを得ないといふ封建
時代では、みんなあきらめてゐるかもしれませんが、今は、自覺時代
ですから、自覺あるものにとつては、わづかな差別も痛切に身
にひびくわけです。捨て、置けないといふのは、さうした理由
によるものですよ。」

支部長さんは、それにつけ加へました。

「よくなつてゐる、といふのは、表面だけのことで、内側へ
這入つて見れば昔も今も同じことも知れません。……大體、
この問題が今日まで残されてゐるといふことを、考へ様によつ
ては、諦めてゐすぎたこと、表面少しよくなつたのに満足し
すぎて、はつきりとした意識のもとに積極的な運動をつとけな

つた爲めであるかも知れません。だから、大いに我々はやらな
ければならないのです」

「さう言へばさうぢやが……、わしは今夜、他所へゆかねば
なりませんから……」。

區長さんは、靜かに立ち上つて、お佛壇に燈明をあげ始めま
した。夕べの勤行をもしやうといふのでせう。

過去のみを考へて將來を思はない老區長さんの後姿を眺め
た時、二人は、一つの大きなあるものを感じました。

「では、さようなら——」。

かへる道すがら、やつぱり、青年でなければならぬことを語
り合つて訣れたのでした。

四

とつぷり暮れてから、青年は、わが家へかへりつきました。
「どこへ行つてゐたの？、こんなにおそくまで……」。

お母さんは、さうたづねた。

「融和問題講演會開催のことで歩きまわつてゐただけれどどこへ行つてもわからないので……。」

青年は、いさゝか元氣を落してゐました。たゞ一度の講演會が、こんなにもむづかしいものかと思つて——。

——非重大説——

差別者側にとつて見れば、一寸口先、手先で差別をしたからといつて、大した問題ではないやうに見えるであらうけれど、被差別者にとつて見れば、それが全人格、全生命の拒否であるからこれ以上の痛苦はないのである。

更にこの差別觀念が日常生活のあらゆる方面——殊に

取りあひはしないよ」

「そんなことがあるものですか、一ばん重大な——。」

「でも、別に痛いのも苦しいのもあるまいし。ふと出来心に一寸、言つて見ただけの言葉などに、そんなにむきになる必要もなかり、そんなものだよ。」

「お母さん、それが間違ひだつて言ふんですよ。差別は、全人格の無視であり、全生命の拒否ちやありませんか。これほど重大なことはないのですよ、お母さんだつて、僕が馬鹿だの氣

經濟的に影響して、マンを得る働きをすら奪はうとするのである。これが重大事でなくて何であらう。

——個人説——

自分に差別がないから——といふので、此の問題に關せず焉をきめ込まうとするのは、あまりに無責任であると言はねばならない。無關心な態度をとるといふところに、既に消極的な差別があるわけである。社會共同責任の上から考へて、當然、自分さへなければと、涼しい顔をして居れないのである。

狂ひだのと罵しられてゐるのを見て、痛くもかゆくもないなんですまして居られますか」。

「……………」。

お母さんは黙つてしまひました。そして御飯の用意をとつてへて呉れました。

「お前さへ差別意識を持たなければ、それでいゝぢやないの」お母さんは、また思ひ出したやうにさう言ひました。

「さうです。私一個としてはそれでいゝかも知れません。世間の人はよく「私には差別がないから——」といふのです。けれどもお母さん、世の中はみんなからなりたつてゐるのです。一人がないからといつて、その人の住む世の中に差別があるのでは、なんにもならないぢやありませんか。日本中に、誰一人差別を持つ人がなくなるまでは、日本人全體に、それを解決する責任があるといふわけです。」

其處へ隣村の叔父さんが訪ねて来ました。

「何を議論してゐるんだね。御飯つぶが飛んでしまふぢやないかね。」

お母さんは、いゝ援兵が来たとでも思つたのでせう。

「この子は、この間、青年融和講習とかへ出て来てからといふものは、一も融和二も融和で、とても仕様がなないのですよ。」

「はゝゝゝ。融和か、遅くさいね」

叔父さんは豪気に笑ひました。

「ぢや、叔父さんは、もう融和なんか必要がないといふのですか。」

「さうさ。俺なんかは、少數同胞の友人をもつてゐて、向ふへ行けば茶も呑む、飯も食ふ、泊まりもする位だからね。だから、よろこんでゐるよ、理解のある人だと言つて——」。

「それで叔父さんは得意になつてゐるのですね、はゝゝゝ」

——寢食説——

いつしよに飯を食ふ。いつしよに寝る。だから融和がよく出来てゐるのだといふ表面的な形式的なことを指して得意になり、あまつさへかやうにしてやつてゐるといふ優越意識に立つてゐるといふに到つては全く鼻もちがならない。通り一遍の社交といふやうなものなら、誰でも如何なるところでもなし得るのである。そんな所に融和の本體はない

もつと深く／＼つき進まねばならないことだ。

——多少説——

數が多ければ大きな問題になるであらうが、極めて少數である時は、別に、やかましく言ひ立てるまでもなからうといふ考へ方は、全く融和問題の本質的重大性を知らないから起る誤りである。

人間を差別する罪惡は、數量の如何によつて輕重のあるものではない。

青年は、あまり叔父さんの單純なのに、思はずふき出しました。

「ね、叔父さん。優越的な立場に立つて茶ものんでやつた、飯も食つてやつた、よろこんでゐる——といふ様なのは、融和でも何でもありませんや。」

「……………」

「ほんとうに、何のハンディギャップもない、極めて自然な人間と人間との交際、といふのならまだしも、さうしてやつてゐるといふ意識こそ、一ばん呪はれた差別意識ですよ。」

「論鋒するどいね。」

「しかも、飯をいつしよに食ふ位が融和なら、猫と人間とも融和してゐるといへますからね。」

「やあ、失敬々々。新進機銃には當れないね。ところでさ、俺の村のやうに數が多ければ、かなりな問題にもなるが、この

質そのものゝ問題である。随つて、その数の多少にかゝらず重大視しなければならぬものである。

—無關係説—

この村、この町には少数同胞がないから、此の問題、此の運動には無關係であるといふ説を分析して見ると少数同胞さへなければ少々位は差別してゐても問題にならないから大丈夫だといふことになる。何んとなれば、少数同胞の無い町村にも差別觀念の存在すること

は立證し得ることである。差別觀念の存在することを認めて居りながら無關係を主張するのは、明かな矛盾であつて、問題にさへならねば放棄して置いてもよいといふ無責任さがあるのである。これを地方の問題として考へ、府縣乃至は國家の問題として考へるならばかやうなことは言ひ得ないのである。ことに現状は無關係といはれてゐる町村ほど差別意識が濃厚なのである。

村のやうに、数が少ない村ではさほど問題ぢやないだらう。」
「叔父さんは、よつほど今日は頭が悪いですね。數と問題の重大性とは少しも關係はないでせう。一人の同胞をでも差別するといふことは、地上、ゆるすべからざる罪惡ですからね……随つて、二百戸ある叔父さんの村でも、三十戸にたりない此の村でも重大性は同じことですよ。」

「参つたく。今日は駄目だ、時に△△の伯父さんはまた來ないかね。」

「まだですわ。」と、お母さんは答へました。

「時間を勵行しないにも程があるね、いつでもだ、どうも困る。」

「はゝゝゝ、悪口きゝつけたぞ。」と、伯父さんが裏口から、ひよつこりと顔を出しました。

「はゝゝゝ。叔父さんはね、僕に理論まけして、その餘憤を

伯父さんの方へもつてゐつてゐるんですよ。」

と、青年は御飯を終へて茶をのみながら言ひました。

「何の問題だね？」

「差別問題！」と青年は言下に答へて、この伯父さんにも説教しなければならぬと考へました。

「融和問題かね。俺の村には、その心配はない、全然無關係だから——」

伯父さんは、すゞしい顔をして、煙草をふかしながら、さう言ひました。

「それがいけないのです。その村にないから、その町にないから、といつて、それが全然無關係だなんていふ事は絶対にありません。」

「どうしてさ？無關係はあくまで無關係ぢやないか。」

「無關係といはれてゐる町村ほど差別意識が濃厚なんでよ。」

平生、この問題に對して理解することにつとめないうし、注意力を缺いてゐますし。……」

「うぬ。」

「そこで、無關係といふことは、町村内に少數同胞がないといふことだけにとどまつて、差別意識、融和問題の上から言はば當然、有關係なんです。」

「ろまく言ふね。」

「言ふのぢやなくて、ほんとうのことなんです。」

此の時、叔父さんは伯父さんに言ひました。

「今日は、すばらしく頭がいゝんだ。相手になればまける一方だよ。」

青年は笑つて答へました。「頭がいゝので勝つちやありません。僕は、眞理を語つてゐるから勝つのです。」

五

理想説

神の愛、佛の慈悲が徹底すれば、修養の極致に到達すれば、融和問題も自然解決されるといふ理想論は、その宗教を信じてゐる人達などにとつては、至上の法則であらう。けれども現實を眺めた時、全くこれと反対な現象を見得るのである。宗教團體の中にも、同じやうに、差別の事實が存在するのであつて、これが理想的な解決は行はれてゐないのである。かうした理想論にわざわざひかれては現實の問題は、到底、その端緒にすら就き得ないのである。此の問題は觀念の上のもの

その夜、お寺を會場にして、教化聯盟主催の思想問題講演會が開催されることを青年は思ひ浮べました。

で、叔父さんたちに挨拶をして、その會場に出かけました。

講師はある修養團體の幹部と牧師さんについて佛教××宗の布教師の人とでありました。

口をそろへて、修養信仰の徹底、神の愛、佛の慈悲が徹底すれば、地上あらゆる闘争差別の問題は解決すると説くのでした。

青年は、講師室に訪れて、融和問題はそんなに簡単に、佛の慈悲、神の愛だけで解決がつくであらうかと言ふことを質問して見ました。

「かへつて、融和團體などをつくつて、宣傳することは、どうかと思ひます。修養、信仰の極致に到達すれば自然に……」

といふ主張は同じことでありました。

ではなく、現實血の滴る問題として、一瞬も速かな解決が必要であつて、それならばこそ、目的へまつしぐらに進む團體の組織があるわけである。

あることを語りました。そして、窮極は、あなた方の仰有る通りであるかも知れませんが、運動の方法としては、はつきりと此の事を打出して行はねばならぬことを話したのでした。そして、あなた方の御力によつて、特に融和問題中心の講演會などの開催を依頼しました。

會場を出ての歸路天を仰ぐと、冴えた空には無数の星が美しく輝いて居りました。その星の光が、仄かに輝きあつて、自分の行く手ををたらしてゐるのでした。

「あの小さい星でも、集まり合つて光ればあんなにあかるい星あかりになるのだ。僕のやうな小さな人間でも一生懸命になれば、あれだけの光は輝き出るであらう。そして數多い同志を求めて、やれば、やれないことはないだらう」。

青年は、希望多い瞳をあげて、再び、星空を仰いだのでした。

融和運動への通俗的批難について (終)

吾等の信條 俠・熱・和・誠

同志よ“起て”

この聖き、運動の爲めに!!

同志よ“來れ”

互に結ばれて、働らかう!!

運動のタメニ御願ヒ!! コノ小冊子ヲ讀ンダ
ラ、貴方ノ友人ニ、又ソノ知人ニ、次カラ、
次へ、御廻讀ヲ願ヒマス

御入用ノ方ガアレバ、直ニ發行所へ御注
一サイ、經費ノ許ス限リ無料ニテオ贈リシ
ハ

昭和八年十一月十日
昭和八年十一月十五日

執筆者 藤 範 晃

京都府社會課内

編輯人 森 梁 香

京都市伏見區深草飯食町八二五

發行人 河 上 利 治

京都市下立賣小川東入

印刷人 中 西 勝 太 郎

京都市下立賣小川東入

印刷人 中 西 印刷合名會社

京都市伏見區深草飯食町八二五

發行所 大日本青年融和愛國聯盟

機關誌 融和事報社

